

郁達夫「沈淪」における名古屋と名古屋人の描写について

寇 振鋒

1. はじめに

郁達夫（1896 - 1945）は、中国現代小説史上において大きな成果を挙げた、長い日本留学の経験を持つ作家の一人として注目されている。中でも、1919年第八高等学校（以下は八高と略す）卒業まで、四年間の留学生生活を過ごした名古屋は彼の作品との関係がかなり深い。例えば、名古屋が彼の自伝的小説「沈淪」¹の素材となっている他にも、八高在学中に書いた、原稿散逸の八篇の白話小説の試作も恐らく名古屋での生活を素材にした²。そして、小説の他に、八高時代に作った旧体詩には、名古屋とその周辺の各地の風光が数多く描かれている³。

郁達夫と日本との関係、郁達夫と日本文学者、及び「沈淪」と『田園の憂鬱』『布団』との関わりはすでに多く論じられており⁴、郁達夫と名古屋との関係もかなり指摘されているが⁵、しかし、小説「沈淪」の視野に絞って作者の当時の心境に関する研究はまだ、多くは見られない⁶。

「沈淪」は郁達夫の代表作で、中国私小説の嚆矢である。この小説に因み、同様の傾向を持つ作家が「沈淪小説派」⁷と称されたことは、「沈淪」の中国現代小説における地位を十分表わしている。

一方、郁達夫が「文学作品はすべて作家の自叙伝である」⁸と主張していたように、名古屋での留学生生活を素材とする自伝的小説「沈淪」における描写は、彼の観察した身近な名古屋と名古屋人であることが想像できる。

そこで本稿では、小説「沈淪」において郁達夫は、名古屋を如何に描写しているか、どのような名古屋人を登場させているか、その中に作者のどのような内面世界が含まれているか、そして、八高在学中に何回も差別された、弱国国民としての郁達夫が名古屋と名古屋人を如何に怨み、愛したかを探ってみようと思う。

2. 名古屋に関する描写と作者の当時の心境

1913年9月、18歳の郁達夫は長兄郁曼陀に連れられ、上海から出発し、神戸に上陸し、大阪、京都、名古屋を見物しながら上京した。その途次名古屋で一泊した⁹。1915年7月東京の第一高等学校特設予科を修了し、同年9月11日、東京を出発し、名古屋に到着、同月13日に八高の第三部（医学）に入学した。しかし、翌年に文科へ転科した。そのため、八高での在学期間は三年から四年に延びた。最初は学校に近い名古屋市郊外御器所村念仏池のほとりの公認下宿に入った。下宿先は、その後少なくとも五度が変わったと思われる¹⁰。

「沈淪」の主人公「彼」は、富春江のほとりの小さな町の出身であり、すでに日本で二三年間留学したN市高等学校の学生である。この「N」は、即ち「名古屋（Nagoya）」の最初の英文字母である。「N市の高等学校」というのは、すなわち名古屋市にあった第八高等学校である。

「沈淪」は、郁達夫が八高を卒業して名古屋を離れ、東京に戻ってから執筆したものである。この小説には名古屋が印象深く描写されている箇所が散在する。名古屋に対する描写によって、「彼」の当時の心境が如何なるものであったのかを読み取ることができよう。

（一）名古屋に対する最初の印象

小説は、倒叙の手法を採り、第4章から主人公「彼」が名古屋に来た時からを述べる。「彼」は一人で夜行列車に乗り、翌朝名古屋の停車場に着いた。その後停車場で同じ学校の学生が同行してくれ、二人は鶴舞公園で下車した。

公園を抜け、稲田の細い道に出たとき、太陽はもう顔を出していた。稲にかかった露が玉のように光っている。前方には林があり、木の間がくれに農家が点在していた。煙突が二、三本農家の屋根につき出し、早朝の清気の中にひめやかに浮かんでいた。一すじ二すじ青い煙が、香炉の煙のようにゆれていた。農家で朝餉のしたくをしているのが知れた。

ここは、鶴舞公園周辺の早朝の景色、及び早朝の農家の様子を描いている。そして、「彼」は自分の前途に対して自身満々であった。この中には郁達夫が初めて見た名古屋に対しての新鮮な印象が含まれている。

（二）下宿先の周辺の景色について

「彼」の下宿の周辺の景色は次のように描かれている。

いま N 市の田舎に来てからというもの、彼の下宿は孤立した一軒家で、四方どこにも隣家はなく、左手の門の外は往来で、前後はみな田圃、西側は溜め池、(中略)だが夜になると、窓の外は四方いずれも陰々たる暗闇であり、おまけに N 市の付近は一大平野で、一望連天、四方にさえぎる物なく、遠くに明滅する燈火は、森々と鬼気を感じさせた。

この中の「陰々たる暗闇」「森々と鬼気」という言葉遣いから見れば、名古屋に対してまだ不案内な「彼」の孤独、鬱積した心境が現れていると考えられる。このような環境において、「彼」はこの一日目の夜から自分の前途に徐々に失望し始めた。

(三) 八高の周辺について

八高の周辺は次のように述べられている。

彼の学校は N 市の郊外にあって、さきにもいったように、付近は一大平野であったから、四方の地平線は広々と遠くのびている。そのころ日本の工業はさほど発達していなかったため、人口も今ほど多くはなく、彼の学校の近辺にはまだ林や空地、小さな丘などがあった。学生めあての文房具や食堂があるほかは、付近には住民もいなかった。荒野の中に学生めあてにつくられた下宿が、暁天の星影のように、田畑の中に点在するのみであった。

ここで作者は、当時の名古屋市、及び学校付近の状況を印象深く紹介している。当時の名古屋、及び八高周辺の環境は、複数の八高生の思い出において、「彼」の見たものとはほぼ一致している¹¹。このような「静」の環境において、静かに読書ができることは「彼」にとって一番の楽しみであった。実際、郁達夫は確かに八高在学の四年間に読んだ本は「露、英、独、日、仏の小説は全部で一千冊くらいに達した」¹²という。名古屋での生活において、読書は郁達夫と主人公「彼」にとって孤独から抜け出す主な手段の一つとなっていた。孤独、憂鬱、抑圧された性の苦悶を持つ「彼」にとって、自分の楽しみに関する描写はこの一箇所だけである。

(四) 秋の名古屋について

第 5 章において、郁達夫は秋の名古屋の風景について次のように描いている。

秋がまたやってきた。はてしなき蒼空は日々その高さを増していく。下宿のわきの稲田も黄金色を帯びてきた。朝夕の涼風は刃の如く骨身を刺し、秋冬の佳日はまぢかに迫った感じだった。

孤独な「彼」は早秋の名古屋で自然の情趣に思いふける。転々と何回も引越してにぎやかな都市の世界から離れようとした「彼」は、結局大自然の中で更に孤独と不安を感じたように見える。

第6章において、名古屋の秋の景色はまた次のように触れている。

彼の住む山頂から南方を見下ろすと、眼下に一大平野がひらけている。平野の稲はまだ収穫前であった。黄金色の稲穂が紺碧の空を背景に朝日に映える光景は、まさにミレー（Millet）の田園風景を彷彿させる。

これは早秋と対比して名古屋郊外の豊作が見込まれる秋の景色を描写している。郁達夫は名古屋の秋をフランスの画家ミレーが描いた田園風景に喩えた。これによって、郁達夫は名古屋郊外の田園風景を最も印象深く感じていたと思われる。

（五）名古屋の梅園について

ある土曜日の夜、「彼」はかねてから好意を抱いていた、入浴している下宿の娘を覗き見してしまった。翌日に、下宿を逃げるように飛び出した。「A神宮」を見かけると、そこでは何軒かの茅屋が囲んであった。歩いているうちに、梅園に入り込んでしまう。

頂上の平地の西側は千仞の絶壁で、向かいの絶壁と相對峙しており、その二つの絶壁の間に、いま彼が歩いてきた南北に通ずる道があった。絶壁を背にして二階屋が一軒、平屋が数軒あった。どの家の門もしまっているところを見ると、梅見の頃に酒食を売る店にちがいない。二階屋の前には芝生があった。芝生には白い石がいくつか置いてあって、花園を囲んでいた。花園には梅の古木が横たわっていた。芝生の南端、山上の平地がまさに南に向かって下りようとする所に、梅林の由来を記した石碑がひとつ立っていた。

ここの「A神宮」はすなわち日本三大神宮の一つである「熱田神宮（Atsuta）」である。この寂しくて静かな梅園を気に入った「彼」は、園中の二階屋に引越してから、この二階屋、及び周りの景色を、長兄と兄嫁への手紙において、「大海を見下ろすことができ、後ろを振り向けば名古屋全市の景色が見えます。景色は孤山放鶴亭に劣りませ」¹³と詳しく説明している。

この手紙を加えて考察しても、当時の名古屋の建物はまだ低い上に、この梅園の位置がかなり高かったのではないかと思われる。郁達夫は、この地方が故郷浙江省の杭州にある有名な観光地孤山放鶴亭と肩を並べることができることと比

喩した。これは郁達夫が小説において梅園を印象深く描いた理由であろう。孤山は杭州西湖の北西の一角に位置する。放鶴亭は孤山の北東部の坂にあり、宋代の隠居詩人林和靖（967 - 1028）を記念するために、元代に建てられた¹⁴。名古屋郊外の梅園に引越した郁達夫は、自分の現状を林和靖の隠居生活に喩えたと思われる。逆に言えば、辺鄙で人影さえめったに見かけない家に住んでいる郁達夫の、内面世界の孤独が十分想像される。

（六）雨後の名古屋について

第6章においては、この梅園に引越してから、見かけた雨後の名古屋の美しい景色が次のように描かれている。

ある朝、早起きをして東側の窓をあけると、前方の地平線上に赤い雲が幾すじか浮動し、東の空半分がほのあかい灰色に映えていた。昨日は一日中小雨がふりつづいたので、このすがすがしい旭日を仰ぐと、ふだんよりいくらかうきうきした気分になってきた。

この雨後の景色は「彼」をいい気持ちにさせた。孤独、鬱屈に苦しむ「彼」でさえこの景色を見てうきうきした気分になったことから、名古屋の雨後の景色の美しさが想像できる。そして、郁達夫が名古屋の雨後の景色を好んだと考えられる。

（七）当時の名古屋港について

第7章、朝、梅園中で会ひきしていた男女に出会った彼は、帰宅して布団の中で四時まで眠りこけ、起きてから「神宮前」の電車停留所から電車に乗り、一度乗り換えて築港へ着いた。

前面には大海原が、午後の陽ざしを受けて微笑していた。海をへだてた南方には、青いひとすじの山なみが、透明な空気の中にかすかに浮かんでいる。西方には長い防波堤が湾の中ほどまで伸び、その向こうには灯台が巨人の如く直立していた。空船とはしけが、もやった場所で静かに浮動している。

この段落は当時築港の静かな風景を描いている。空船とはしけの浮動、及び話し声はともに築港の静かさを際立たせている。その後、「彼」は築港でしばらくうろうろしてから、小さな蒸気船に乗る。齊藤亮氏の考察によると、この蒸気船は、愛知県が東西築地連絡のため1915年7月1日営業を開始したもので、乗船料は一人一銭であったという¹⁵。つまり、郁達夫が名古屋に来る直前にこ

の蒸気船が運行し始めたばかりであった。

以上、「沈淪」における名古屋を描写する七つの箇所を取り上げた。名古屋を離れた後に執筆していることから、これらの風景は当時の郁達夫に深い印象を与えたと想像できる。言い換えると、執筆時に四年間生活した名古屋に対しての記憶は、まだ新しかったのであろう。なお、郁達夫は名古屋市内の風景を描くことはなく、静かな郊外だけを視野に入れていた。これらの名古屋の風景は、「静」によって表されているといえる。この都会から離れた「静」は作者にとってすなわち「遁世」である。この「遁世」において、名古屋の景色を観察した。これらの「静」の描写は「彼」がにぎやかな都会から「遁世」しようとする心理を表していると思われる。郁達夫のこのような遁世の心理は次の三つの理由に由来していると考えられる。

一つは郁達夫自身の嗜好と切り離せない。郁達夫はかつて、「自身が多分小さい時からの教養と成人以後の習慣のため、愛読したものは多くが止水のような静の遁世文学である」¹⁶と認めている。

もう一つは、差別を避けることができるためである¹⁷。差別の程度から見れば、東京は地方都市名古屋よりひどく、名古屋市内はまた郊外よりひどかったのであろう。そのため、小説には至るところに「遁世」が現れている。要するに、差別を避けるために、寂しい郊外に引越した、それは一時の「遁世」のためであると考えられる。

三つ目は、八高時代の郁達夫が出した長兄の嫁への手紙によると、彼は名古屋に来た翌年の1916年の春から神経病の発作が始まったことである。そのため、春季の試験も途中でやむを得ず休んだという¹⁸。なお、その後に、長兄への手紙に、「神経衰弱症はすでに治り、ただ毎朝熟睡できません」¹⁹という言葉もあり、八高卒業前の1918年4月27日付けの長兄への手紙にはまた、「私の病気はあるようでもあり、ないようでもあります」²⁰などという記述もある。こうしたことからすると、郁達夫は名古屋にいた当時、神経衰弱症に苦しんでいたと思われる。まさしく小説の主人公「彼」の「憂鬱症」と同じであろう。これが恐らく「彼」が遁世的となった一つの理由だと考えられよう。

つまり、この遁世の心理のおかげで、郁達夫は名古屋の郊外の風景を好んで描いたのであろう。ただし、郁達夫はただ景色を描写するためだけではなく、これらの景色を借りて自分の八高在学中の心情も述べ表そうとした。

以上のような小説の一背景としての場所の景色の描写を重視するという小説

手法は、当時の中国小説においては極めて稀なことである²¹。この景色の描写を通して、主人公「彼」の活動背景を十分に描き出し、「彼」の複雑な心理をも際立たせた。つまり、郁達夫の名古屋留学時期の内面の喜怒哀楽は小説「沈淪」における景色から透視できる。

3. 名古屋人に関する描写と作者の当時の心境

まず、八高を卒業して名古屋を離れ、東京大学に戻ったときの話から見てみよう。ある日、詩友富長蝶如と二人で本郷区三丁目の角のカフェで、東京の大学生に軽蔑される記述がある。その差別に対して郁達夫はその後に、「ああしたことは、常のことだ」と²²と静かな声で言っただけで終わった。しかし、その言外の意味は四年間生活した名古屋でもそのように軽蔑されていたことがあると考えられる。

さて、東京では目の前で「チャンコロ」と言われたが、名古屋ではどうであったのか、郁達夫の日記を見てみよう。1917年3月25日の「日記」には、「午前、藤塚先生が中国文学を講じて中国人の太刀打ちできないことを嘲罵した。もう二度とそのような軽薄ぶりをさせないよう、校長に手紙を出そうとしたが、更に侮辱されることを恐れて、果たさなかった」²³という記述がある。

なお、同年5月31日の「日記」にはまた、「午前、日本人某に嘲られ、我が国の弱いことをからかった。これから一意に努力勉強しなければならない。それを以って報復を図ろうとする」²⁴という類似の内容が記されている。この二日の「日記」より、郁達夫が名古屋で愚弄されたことは確実である。

「沈淪」第6章、梅園に引っ越してから、「人を怨んだり、おのれを罵ったりするほかは、することがなかった」といっている。さて、名古屋人にかからわれた郁達夫の分身である「彼」は、どのような名古屋人を怨んだのか、そして、自身をどのように罵ったのだろうか、怨まなかった人がいるのか、この一連の疑問を持って小説「沈淪」を通して探ってみよう。

「彼」は名古屋で接触した人を「日本人」と呼ぶが、実際は名古屋人を通じて「日本人」を観察した。自伝的小説中で描いた「日本人」はやはり名古屋人だったと考えられる。そして、名古屋人に対しての描写は大きく、怨んだ人、愛していた人、一般の人という三種類に分けることができる。

(一) 怨んだ名古屋人について

郁達夫は、怨んだ名古屋人に対しての描写において、ほとんど「彼」の内面

的衝突を通して書いている。

(1) 入学した「彼」は、「やつらは日本人。おのれの仇敵だ。いつかはきっと復讐してやる。必ず仇をとってやるぞ」と、学友たちをますます憎むようになった。しかし、落ち着いてから、「彼」はかえって、「やつらは日本人。やつらがお前に同情しないのはあたりまえではないか。やつらの同情を得たいがためにやつらを憎むなんて、お前の方こそまちがっているのではないかと、自分にいい聞かせている。

(2) ある日の放課後、三人の日本人学生と一緒に下宿先に帰る時に、向こうから歩いてきた二人の女学生に出会った。彼らの挨拶を聞いた「彼」は、下宿に逃げ帰って自身の臆病を自嘲した。そして、二人の女学生の生き生きした眼を思い出して叫び声を上げる。そこで、「彼」は彼女らからの差別を感じたので、「復讐だ、きっと復讐してやるぞ」と誓っている。

この復讐の心理に対して「彼」はまた、「なんで日本なんぞへ来たのか。なんで学問なぞにあこがれたのか。日本に来た以上、日本人に侮辱されるのもやむをえないではないか。中国よ、お前はなぜ強くないのか」と反省している。

(3) 「彼」は肉欲を満足させるため料理屋に入ろうとしたところに、「いらっしゃあい、どうぞ」と誘われた料理屋の仲居に対して、「彼」は、「憎いやつめ、お前たちまでおれの小心を笑うのか」と罵った。しかし、仲居たちの前まで歩み寄ったとき、「彼」はまた、「まるで子供のように泣き出さんばかりであった」。

(4) 第7章において、郁達夫はまた、酒肴を運んできた酒料理屋の若い仲居に対しての渴望が露骨に描かれている。ここにおいては、「彼」が異性、及び恋への渴望を表しているとともに、「彼」の弱気と孤独を際だたせている。自分の行為を思い出した「彼」はまた、「畜生、犬め、卑劣なやつ、と歯ぎしりして彼が自分を罵るのもこのときである」と自分を罵った。ここは日本の女性の身なりとその美しさの紹介でもあり、「彼」自身の日本女性への好奇心の告白でもある。この仲居は「彼」に「お宅はどちらで」と訪ねたとたんに、断頭台に立たされたような感じであった。

日本人は中国人をさげすんでいる。それはわれわれが豚や犬をさげすむのと同じだ。日本人はみな中国人を「支那人」と呼ぶ。この「支那人」なる三文字は、日本では、われわれが人を罵るときの「賤賊」よりもさらに聴きづらいものだ。いま彼は花も恥じらう乙女の面前で「おれは支那人なのだ」と自認せざるをえぬはめになったのである。

このように思い込みながら、「彼」は全身が震え始め、目にはまた涙がこぼれようとするほどであった。「彼」にこのような劣等感を持つ内心があったからこそ、この小説は、「そうした経験を共有する青年たちに最初にそれを共感させた作品である」²⁵と評価されるのである。

「彼」は、仲居が隣のお客さんからかわれて嬌声をあげて、「いや、いや、お隣りにお客様がいなさるから」という話を聞いてから、心の中において「犬め、俗物め、よくもおれを侮辱したな。復讐だ。きっと復讐してやる」と罵っている。

小説の中の、怨んだ名古屋人に対する描写は、以上の四つの復讐と自虐、内面の衝突の場面が取りあげられている。

「彼」は「復讐」と何度も言及するが、結局自虐で終結する。この復讐はまた、祖国の富強を願うという主題につながっている。しかし、小説において、現実の差別された事例が一つも取り上げられていない。しかも、小説においての怨みはすべて「彼」自身で考えたものである。そして、小説に登場した、上述の名古屋人は「彼」との正面衝突がなく、全然「彼」を軽蔑する気がなかったと考えられる。むしろ、「彼」の猜疑心がこれらの無関係の名古屋人を怨んだのである。というのは、弱国の国民としての「彼」は至るところで軽蔑されてきたために、猜疑心が強くとなっていたからである。内心に復讐の心理が湧いてくるが、しかし結局落ち着いてみると、自虐、自責の心理が遥かに優位に立っていた。「彼」の名古屋人に対する復讐は、まるで魯迅の小説『阿Q正伝』中の阿Qのようである。弱気の「彼」は精神勝利法を使って復讐を行った。しかも、「沈淪」(1921.10)の刊行は『阿Q正伝』(1921.12)より二ヶ月も早かった。つまり、「沈淪」中の、主人公の自分を慰める精神勝利法は、『阿Q正伝』よりも早かったと考えられる。

しかし、病的な「彼」は接触した名古屋人に対してすべて怨むことはなかった。さて、名古屋人に対して復讐の心理の他に、別の感情が現れているかどうかを見てみよう。

(二) 愛していた名古屋人について

「彼」が名古屋に来た理由は、「美人の産地であることを耳にした」とのことである²⁶。この理由は、今の名古屋人にとっても「名古屋人としては鼻が高い」²⁷と自慢するほどとなっている。

「沈淪」において、「彼」が愛していた名古屋人がいる。その人は入浴を覗いた家主の娘である。郁達夫がかつて「日本の女性はみんな優しく可愛い」²⁸と回想したように、小説第5章において、「彼」が家主の娘の描写は紙幅を大幅に占めている。

幸い彼の下宿の家主の家に、彼の心を引き付ける娘がいた。これがなければ、彼は疑いなく自殺していたであろう。家主の娘は今年十七歳、面長で目が大きく、笑うと両頬にえくぼができ、口には金歯が一本のぞく。彼女は自分の笑顔の可愛さを確信していたから、いつもよく笑った。

彼はひそかに彼女を愛していた。にもかかわらず、彼女が食事を運んできたり寝床を敷いてくれるときなど、彼はいつも一種犯し難いそぶりをよそおってしまうのである。心では彼女と言葉を交したいと思っても、いざ彼女に会うと、どうしても言葉が出てこない。彼女が部屋に入ってくると、彼はもう息も吹きぬほど胸がつまってくる。彼女の前にいると苦しくてたまらないので、このごろは彼女が部屋に入ってくるときは、彼はつい部屋からとび出してしまっていた。しかし、彼女に対する思慕の情は日に一日と濃くなっていった。

以上から分かるように、「彼」の内心において、いかに家主の娘を愛しているかが想像できる。しかし、臆病な「彼」は声をかける勇気がない。それでつい彼女の入浴の姿を覗いてしまったのである。土曜日の夜覗いた、入浴する家主の娘に対して「雪のように白い二つの乳房 ふくよかな白い太もも 全身の曲線」という赤裸々な描写がある。

「彼」は、覗いているうちに、ついに震える額でガラス窓に打ち付けてしまった。すると、「蒸気につつまれた全裸のイヴは<だあれ>となまめいた声を発した」ので、「彼」は自分の部屋へ飛んでもどり、その一晚は怖さ、恥ずかしさのため、一睡もできなかった。結局、異性への好奇心を持つ、性の苦悩に陥った「彼」は引越した。それから、内心にあった愛情もそれがきっかけで失ってしまった。

さて、どうして「彼」は彼女には告白できなかったのか。その根本は「彼」の自身の国家の弱小さにあり、両国の地位の不平等が原因である。「彼」は愛情に対しては渴望していたが、最も愛していた主人の娘には結局告白できず、片思いだけで終わった。この片思いの描写を通して、郁達夫は自身の国家が弱小であれば、異国において愛情をも得られないことを表わそうとしたのであろう。

なお、この女性のモデルについて、当時御器所の公認下宿の娘後藤隆子だと指摘されているが²⁹、しかし郁達夫の日記によって、この後藤隆子は下宿先の娘ではなく、八高に通っていたときの途中の雑貨店の娘だということが分かる³⁰。そのため、「沈淪」中の下宿の娘のモデルは後藤隆子ではなく、違う人か、それとも複数の人によったのであろうと思われる³¹。

「沈淪」中の二人の女性の描写を通じて、郁達夫は彼自身の煩悶や性の苦悩を表しているとともに、自己満足と性の欲望を追究している。このような露骨な性欲の描写は郁達夫の前期作品に共通する風格の体現である。この異性への好奇心はまた、郁達夫の小説理論の一環ともなった。例えば、郁達夫の「小説与好奇的心理」³²という文章の冒頭では、好奇心の重要性を強調している。なお、これらの人物に対しての描写は、五年後の「小説論」において、小説における登場人物由来について「第一に、彼自身が自らの目で観察して得たものである」³³と自ら指摘したように、郁達夫自身が観察したうえで描いたものと思われる。

この小説には、「彼」にとって、怨んだ名古屋人もいれば、愛していた名古屋人もいる。そのため、復讐と愛はまた、小説中の一大衝突となる。郁達夫が『沈淪』自序」中で、「沈淪」のモチーフは「性の要求、及び霊と肉の衝突」³⁴と指摘しているように、衝突と矛盾が小説中に表現されている。その衝突と矛盾は愛と憎、内面と外面、復讐の想いと自虐の念の面に現れる。つまり、「彼」の内心に復讐と自虐が相半ばし、霊と肉が相半ばし、愛と憎がまた相半ばする。要するに、郁達夫の名古屋人に対しての描写はほとんど、衝突を通して表現されている。主人公「彼」が「憂鬱症」の患者に設定されているために、復讐と自虐にせよ、愛と憎にせよ、その衝突、矛盾の描写は皆説得力があるように見える。

（三）一般の名古屋人について

上述の二種類の人々とは別に怨みや愛を感じなかった一般の名古屋人も登場している。最初の下宿先の「対応も懇勤であった」主人に触れている。全然軽蔑的な言葉を含まない、二人の親切な農夫も描いている。一人は「彼」に先に挨拶した農民である。もう一人は梅園の家を貸した農民である。しかも、梅園に来た後の冬になって自炊が嫌いになった「彼」は、「毎日の食事は、麓の園丁の家に任せてしまった」と書いていることから、これは名古屋人の親切さと優しさの縮図だったとも考えられる。そして、「彼」は学友たちをすべて敵視する

ことはない。中には、学校まで同行してくれた親切な八高生もいたのである。

つまり、「沈淪」において怨んだ名古屋人、愛していた名古屋人、一般の名古屋人という三種類が描かれている。この三種類の人こそ、郁達夫が名古屋滞在時の複雑な内面世界の反映であるといえる。

4. おわりに

以上、主に郁達夫の自伝的小説「沈淪」における名古屋の名所、及び名古屋人に対しての描写を整理した。名古屋に滞在していた四年間は郁達夫の人生中の最も重要な転換期である。そして、名古屋での生活は郁達夫に小説の素材を提供した。

郁達夫は作品において、自然の美と人体の美を重く見ていた。一方、郁達夫が「大自然に対して熱中することは、私が小さい時からの一種の天性のようである」³⁵と述べたように、このことは小説「沈淪」において、名古屋郊外の大自然に対する描写が多く現れている理由であろう。名古屋の景色に対する描写は、喜怒哀楽の心境を表している。そのため、作品において情景と感情がほどよく混じり合っている。

「沈淪」には名古屋での愛と憎、復讐と自虐の衝突が現れているが、しかしその復讐はただ内心で言うに留まり、他人を誰も実際に傷つけない内心の復讐にすぎない。作品のみならず、現実の郁達夫は、日本人、日本文化に対する愛、軍国主義に対する憎が相半ばしていた。

小説の内容から見ると、郁達夫の実際中の交友にせよ、名古屋の風景にせよ、名古屋に対する印象は恐らく悪くはなかったのであろうと考えられる。むしろ、四年間の留学生生活を過ごした名古屋と名古屋人に対して好感を持っていたのではないか。たとえば、その後の「日本的文化生活」³⁶という文章においては、日本の文化生活を絶賛していた。さらに、「終始一貫して、郁達夫は本来の姿の真の日本・日本人・日本文化が好きで、それを愛し続けた」³⁷と郁達夫の日本観は積極的に評価する人がいる。

要するに、名古屋、及び名古屋人に対しての描写は、「沈淪」が現代中国で大きな反響を呼んだ理由につながったのみならず、また郁達夫が一挙に有名になったことと切り離せないのである。

注

- 1 本稿の「沈淪」は三篇揃った小説集ではなく、単独とした小説をさす。なお、訳文は『郁文達夫：留東遺芳』（八高創立九十年記念祭実行委員会編、1998年6月）所収の駒田信二、植田渥雄訳本による。なお、「沈淪」はまた岡崎俊夫（東成社 1940年4月）の日本語訳本もある。
- 2 『金丝雀』『桜花日記』『相思樹』『病中歲月』『芭蕉日記』『晨昏』『雨夜巢』、及びその他の「一人の留学生と日本少女との恋愛物語を語った小説」（前掲「五六年来創作生活的回顧」初出『文学周報』第5巻第10期、底本は『郁達夫文集』第7巻、1983年11月、郁雲『郁達夫伝』福建人民出版社、1984年4月p36参照）がある。その中の『雨夜巢』は、当時に名古屋で知り合った篠田梅野との交情を描いたものであったようだ（『郁達夫詩詞集』浙江文芸出版社、1989年12月p106）。
- 3 前掲『郁達夫詩詞集』によると、八高時代の旧体詩の数はなんと232首に及ぶ。その中に、『第八高等学校校友会雑誌』に載せた詩は28首であり、『新愛知新聞』（『中日新聞』の前身）に載せた詩は46首である。また『文字禅』に3首、『随鷗集』に2首を載せた。
- 4 例えば、許子東「郁達夫与日本」（『華東師範大学学報』1981年第1期、『郁達夫新論』浙江文芸出版社、1984年3月所収）、祖父江昭二「日中両国の文学者の交流 郁達夫に焦点を当てたおぼえ書き」（『現代中国文学6・郁達夫・曹禺』河出書房新社、1971年12月）、陳齡の博士論文『郁達夫と日本文学者の交渉』（名古屋大学大学院国際開発研究科、2002年）、伊藤虎丸「郁達夫と大正文学 日本文学との関係より見たる郁達夫の思想＝方法について」（伊藤虎丸他編『近代文学における中国と日本：共同研究・日中文学関係史』汲古書院 1986年10月）、小田岳夫『郁達夫伝：その詩と愛と日本』（中央公論社 1975年3月）、胡金定「郁達夫の小説」（『阪南論集』人文・自然科学編、第29巻第2号、1993年9月）、黎徳机・白嵐玲「混乱，還是一致？ 佐藤春夫『田園的憂郁』与郁達夫『沈淪』三部曲」（『中国現代文学研究叢刊』第2期 1994年）、大東和重「＜自意識＞の肖像 田山花袋『蒲団』と郁達夫『沈淪』」（『比較文学』第45巻 2002年）などがある。
- 5 例えば、岡崎俊夫「郁達夫と名古屋」（『中京新聞』第一面、1947年8月3日、4日）、近藤春雄「名古屋と中国作家」（『中京日本新聞・夕刊』「時想」欄、1950年7月12日）、芥子川津治「郁達夫と名古屋・大喜の梅林」（『朝日新聞・夕刊』〔名古屋本社〕「文化」欄、1971年9月18日）、竹内実「名古屋と中国の作家」（『中日新聞』1997年1月9日）などがある。
- 6 管見によると、稲葉昭二「郁達夫のこと」（『中日新聞・夕刊』「文化」欄、1971年8月9日）、斎藤亮「郁達夫＜沈淪＞考 名古屋の小説＜覚え書（二）」（『郷土文化』第41巻第1号通巻174号、1986年12月）がある。前者は人物に触れているが、詳細ではなく、後者は、小説「沈淪」を中心に名古屋の地名を若干追究したものである。
- 7 黄裔「論“沈淪小説派”」、陳其強、蔣增福主編『世紀回眸：郁達夫縱論』天津

人民出版社、1997年10月。

- 8 前掲「五年来創作生活的回顧」、底本は『郁達夫文集』第7巻、1983年11月p180。なお、この言葉については、すでに詳しく考察されている（鈴木正夫「郁達夫の<文学作品はすべて作家の自叙伝である>について」『野草』第48号1991年8月。底本は鈴木正夫『郁達夫:悲劇の時代作家』研文出版1994年7月）。
- 9 「致郁華（1916年9月4日）」の手紙による。『郁達夫文集』第9巻、花城出版社、1984年9月p317。
- 10 近藤春雄「名古屋と中国作家」（『中部日本新聞』1950年7月12日）によると、「広見ヶ池字念仏七五 山田方」、「御器所村字天神東百十一」、「御器所村字屋敷一 木村謙次方」という三ヶ所がある。稲葉昭二「<沈淪>考証初稿」（『龍谷大学論集』第400・401合併号1973年3日）によると、上述の三ヶ所の他に卒業に近いころには、ある病院の一室を入院のような形で借りたことがあり、また名古屋市内中区瓦町にも下宿したという。
- 11 『瑞穂丘物語』（八高創立60年記念事業実行委員会編1968年10月）p7、94、95、109、及び『八高五十年誌』（八高創立五十年記念事業実行委員会1958年12月）p177など参照。
- 12 前掲「五年来創作生活的回顧」。
- 13 「致郁華、陳碧岑」『郁達夫文集』第9巻1984年9月p312。
- 14 「西湖眉眼在孤山」<<http://jsdj.com/luyou/youji/smgxihu4.htm>>。
- 15 前掲「郁達夫<沈淪>考 <名古屋の小説>覚え書（二）」。
- 16 「静的文芸作品」初出『黄鐘』第41期1934年1月15日、底本は『郁達夫文集』第6巻p208。
- 17 「雪夜 自伝之一章」初出『宇宙風』第11期1936年2月16日、底本は『郁達夫文集』第4巻p95参照。
- 18 「致陳碧岑（1916年）」『郁達夫文集』第9巻p315。
- 19 「致郁華（1916年9月4日）」『郁達夫文集』第9巻p317。
- 20 「致郁華（1918年4月27日）」『郁達夫文集』p322。
- 21 張恩和『郁達夫小説欣賞』広西人民出版社1983年11月p63。
- 22 稲葉昭二『郁達夫:その青春と詩』東方書店1982年4月p184、185。
- 23 郭文友『千秋飲恨:郁達夫年譜長編』四川人民出版社1996年10月p244。なお、名古屋大学文書資料室所蔵の『第八高等学校一覽』（第八年度～第十二年度）によれば、この藤塚先生はすなわち「修身」「漢文」を担当する藤塚隣であろう。
- 24 前注に同じp245。
- 25 前掲『郁達夫:悲劇の時代作家』p7。
- 26 八高二回生藤田周造の思い出「名古屋美人」（前掲『瑞穂丘物語』p87-89）によると、郁達夫の「美人の産地」という話は決して杜撰ではないことが分かる。しかし、郁達夫が名古屋に来た理由は、第一高等學校編『第一高等學校六十年史』（第一高等學校1939年3月p508）によると、当時は「本人の希望と学校設備の都合とを参酌の上」分配したという。そのため、郁達夫自身の希望もあったであろうと考えられる。

- 27 前掲「郁達夫<沈淪>考 <名古屋の小説>覚え書(二)」。
- 28 前掲「雪夜 自伝之一章」。
- 29 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫編『郁達夫資料総目録附年譜』(下巻)(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター1990年2月p217。
- 30 郭文友『千秋飲恨：郁達夫年譜長編』浙江大学出版社、1989年3月p249 - 251参照。
- 31 複数の説は筆者が2006年10月27日に名古屋大学を訪問した郁達夫の孫郁峻峰に直接聞いたものである。
- 32 初出『文座』第1巻第2期1936年8月1日、底本は『郁達夫文集』第6巻p302。
- 33 「小説論」上海光華書局1926年1日、底本は『郁達夫文集』第5巻p26。
- 34 初出『沈淪』上海泰東図書局1921年10月、底本は『郁達夫文集』第7巻p149。
- 35 「忤余独白 『忤余集』代序」初出『北闘』第1巻第4期1931年12月20日、底本は『郁達夫文集』第7巻p249。
- 36 初出『宇宙風』第25期1936年9月、底本は『郁達夫文集』第4巻p156~161。
- 37 蘇徳昌「中国人の日本観 郁達夫」『奈良大学紀要』第30号、2002年3月。